

己の本性になる — 教育相談、カウンセリングの実践を経て —

安江昊太郎 著

税込価格●1,000円（本体価格 926円）

取扱店●《新得町》相馬商店／共働学舎ミントル《帯広市》岡書／宮脇書店／ザ★本屋さん(コニー店・エルマー店・いっきゅう店) 《芽室町》ザ★本屋さん(ダイイチめむろ店)《移動本屋》鈴木書店《札幌市》環境友好雑貨店 これからや

発行・注文・問合せ●P Cサポート芳賀工房 芳賀耕一

081-0039 北海道上川郡新得町新内西 1-125

TEL: 0156-64-6893 / 090-8708-6334

FAX: 0156-64-6893 / 050-7500-6839

E-mail: kouichi.haga@nifty.com

<http://tomuraushi.com/>



公式HP●<http://tomuraushi.com/> PDF版を公開中

叔父・安江昊太郎(1930年生まれ)は、1953～64年、新得町立上富村牛小中学校や北海道清水高校等の先生をしていて、東京の我が家では「北海道のおじちゃん」と呼んでいました。

北海道のおじちゃんは、上京すると、凧を作ってくれたり、書初めを教えてくれたり、サッカーや自転車で遊んでくれ、お年玉も少し多めにくれるので、私(1955年生まれ)はおじちゃんが来るのを心待ちにしていました。

おじちゃんは、上富村牛小中学校の生徒から「踊りを教えて」と言われると、東京・自由が丘の石井漠舞踊研究所に日参して、押しかけ弟子となります。

夏休みと冬休みの5週間、子どもたちや大人たちのレッスンに混ぜてもらって、毎日、朝から晩まで、レッスンを受けたそうです。

同じ頃、おじちゃんはカウンセリングにも興味をもち、先駆者達を訪問し、「カウンセリング講習会」などに参加するようになります。

1964年、「北海道のおじちゃん」は「日立のおじちゃん」になり、以後は日立市と東京で教育相談・カウンセリングを続けてきました。



20代のおじちゃん

一方、北海道での暮らしに憧れた私は19歳で北海道に渡り、22歳で新得町に移住し、10年前から、廃校となった上富村牛小中学校近くの肉牛牧場などで仕事をしています。

新得に移住したのも、トムラウシでの仕事も、たまたまの縁あってのことですが、無意識のうちに、大好きだった「北海道のおじちゃん」に引き寄せられたのかも知れません。

2017年6月、久しぶりにおじちゃんに会うと、「本を出版したい」と200枚を超える手書き原稿を見せてくれました。これを持って、出版社に売り込みに回ると言うのです。

おじちゃんの意気込みに、私は、電子出版と手作り製本であれば何とかかなと引き受けましたが、入力・校正・表紙デザイン・印刷など、多くの友人らの協力を得て、ついに初版本1000冊が完成しました。

この「己の本性になる」は、おじちゃんが40年続けてきた教育相談・カウンセリングで、クライアントとどのようにかかわってきたかを記録したものです。

おじちゃんは、「教育相談やカウンセリングという仕事は、相談員がクライアントとかがわっていく中で『その人自身の本性になる』ことを手伝う仕事である。」「相談員自身も『己の本性』になっていかねば、できることではない。」といます。

題名だけを見ると、難解な本に思われるでしょうが、教育相談・カウンセリングとは無縁の人にとっても、内容は具体的で分かりやすいので、ご安心ください。

内容はホームページでご確認いただけますので、最初の1～2章だけでも是非読んでみてください。特に中学3年生での戦争体験の話は多くの方に読んでいただきたいです。

この本のあとがきには、「私も、生まれてこのかた、多くの人々から大切なものを預かってきた。この、私のうちにある大切な預かりものを、生きていくうちに人々に渡しておきたいと思ったからだった。」とあります。

この本が、皆さんのロコミ等を通じて、多くの人々の心に届くことを願っています。

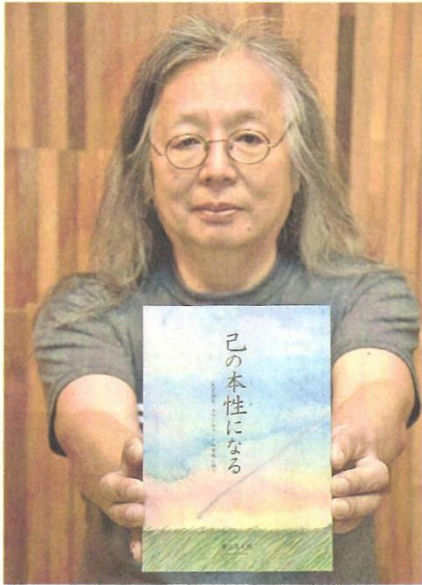
摂食障害の少女や自殺悩む青年…数千人と向き合う

カウンセリングの軌跡一冊に

「大切な体験次世代に」

新得、清水で元教諭の安江さん

【新得】町内の中学や清水高で教諭を務めた安江真太郎さん(88)が、自身の教育相談やカウンセリングの実践体験をつづつた「己の本性になる」を出版した。約半世紀にわたって数千人と向き合った日々を本にまとめた。安江さんは「自分が多くの人から預かった大切なものを次世代に渡したい」と話している。(菊地信一郎)



安江さんの本を手に「最初の1章だけでも読んでみて」と語る芳賀さん

東京生まれの安江さんは、北大卒業後、1956年に新得の上富村牛中へ現在閉校へ赴任。59年から清水高教諭も務めた。その後、茨城県日立市教育研究所の教育相談員などを経て、自営のカウンセリングルームを開設。多くの相談者の悩みと向き合ってきた。

本では、摂食障害の少女や進路に悩む女子高生、自殺を図ろうとした青年など、さまざまなケースを紹介。耳ではなく「体で聴く」をモットーに、あえて話を聞かずに一緒に卓球をして遊んだり、問題のある子供の父親と酒を酌み交わすなど、独自の手法でカウンセリングを追求してきた軌跡が記されている。

安江さんは取材に「子どもたちは常に『こんなことを言ったらバカにされる、しかられる』という不安と緊張の中にいる」とした上で「子どものあまがままを受け止めて尊重すると、信頼感と安心感が生まれ、本性を出せるようになる」といふ。その手伝いをするのがカウンセリングという仕事」と語った。

B5判167ページで千部印刷した。千円。編集作業は安江さんのおいで新得在住

の芳賀耕一さんが引き受けた。本は新得の相馬商店、共働学舎のほか、帯広のザ・本屋さん各店、岡書などで扱っている。本の内容はインターネットで無料公開している。アドレスhttp://tomuraushi.com/ 問い合わせは芳賀さん090・8070806334へ。

■読者より

家に届いた郵便に、思いがけず懐かしいお名前を見つけて驚きました。早速ページを開き、最初から最後まで引き込まれて読みました。文面から立ちのぼって来るものは、以前私が感じた通りの安江先生でした。

私がクライアントとして先生に出会ったのは、生きてきた中で最も辛い時期でした。当時は小学校の教師をしていましたが、人間関係に疲れ果て、生きているのがやっとという状態でした。何度か通って話をしました。この本に書かれている通り、深いところで本当にしっかりと聴いていただいていると感じていました。そのうち、自分でも驚くような変化が起こりました。それまでは絶対に言えなかった相手に絶対に言えなかったことを、言うことができたのです。その日、私は、食べ物に味があることを思い出しました。それから間もなく、風景には色があることも思い出しました。

元気になった私は、教職の傍ら心理学の勉強を始めました。カウンセリングは単なる悩み相談ではなく、その人の生き方を根底から変えるものだを知ったからです。

その後退職して大学院で心理学を学び、現在は臨床心理士としてスクールカウンセラーの仕事をしています。これまで多くの先生方からご指導を受けましたが、私のカウンセラーとしての原点は、安江先生とのカウンセリングです。

カウンセラーとしてはまだ駆け出しで迷うことばかりですが、この本をいただいて、「原点に立ち返りなさい」と言われた気がしています。

今、先生にお会いしたい気持ちでいっぱいです。

(ねじまき鳥)